



■ベトナムで患者さんの診察をする服部氏

1964年、大阪府に生まれた服部匡志氏は、高校生の時に父親を胃がんで亡くしたことをきっかけに、医師を志し、努力の

末に京都府立医科大学に入学。外科医志望だったが、在学中に眼科の木下教授に出会い、その人柄に感銘を受けたことで、眼科医への道を進むこととなった。

同大学卒業後、医局系の病院に勤務したが肌合わず、日本各地の眼科を渡り歩きながら、網膜硝子体手

術の経験を重ねた服部氏は、内視鏡を用いた網膜硝子体手術では世界トップクラスになった。

そんな服部氏がベトナムを訪れたのは、2001年の臨床眼科学会でベトナム人医師から、ベトナムでは眼科医が不足しており、手術が受けられず失明する人が多いので助けて欲しいと現地の患者さんへの治療と医師への指導を懇願されたことがきっかけだった。高給をもらい、何不自由ない生活をしてきたが、自分の技術で

多くの人が助かるのであればと、全てを投げ打ってベトナムに行くことを決意した。現地に行き日本なら助かる患者さんが失明していく悲惨な状況を目の当たりにした服部氏は、「半端なことではできない。人生をかけなければ」と決意を新たにし、本格的にベトナムでの治療に取り組んだ。

活動開始当初、ハノイ国立眼科病院を拠点に無償で手術や指導をしていた服部氏は、不足していた医療資機材を揃えるために自らの貯金を切り崩して数百万円もする医療資機材を購入し持ち込んだだけでなく、貧しい患者さんの手術費を肩代わりすることも多かった。

また、地方に住む貧しい人々が、失明していてもハノイの病院に来ることができないことを知ると、2005年からは週末にベトナム各地を巡り、毎回約1000人の患者さんを無償で治療してきた。この間の活動費も手弁当で賄っていた。

活動資金を工面するため、月の半分は日本に帰国し全国の病院でスポット勤務医として働き、残りの2週間を現地でのボランティア活動にあてた。

今までに治療したベトナム人は1万3千人に上り、併せて12年間で20名以上の網膜硝子体外科医を育てた。勤務時間を超えて働くことに初めは反発していた現地の医師や看護師たちも、その熱意に打たれ協力的になり、口ひげを生やした服部氏を「ベトナムの赤ひげ先生」と、親しみを込めて呼ぶようになった。

その人道的かつ国際的な活動は次第に評価され、現在はNPOの支援も得ながら多くの患者さんに生きる希望を与え、日本と

ベトナム両国の友好関係を促す存在としてもその活躍の場を広げている。

このような活動の礎となつているのは、服部氏が医師を志し始めた頃に心に決めた「患者さんを思いやれる医師になる」という強い気持ちだという。患者さんのことを一番に考える医療ネットワークをベトナムから世界へ発信すべく、服部氏は「患者は家族」をモットーとして今も前進し続けている。



■医師へ手術指導の様子

# 患者は家族

ベトナムの赤ひげ先生が目指す患者さんを思う医師の姿

## 医療従事者部門(国際)



はっとり ただし  
**服部 匡志**  
Tadashi Hattori

アジア失明予防の会 理事  
Board Member, Asia Prevention of  
Blindness Association

推薦者 **川口 順子** 明治大学国際総合研究所 特任教授

1964年大阪府生まれ。1993年、京都府立医科大学卒業。京都府立医科大学眼科レジデント。多根記念眼科病院(大阪府)、愛生会山科病院(京都府)、出田眼科病院(熊本県)、聖マリア病院眼科(福岡県)、海谷眼科(静岡県)を経て、内視鏡を用いた網膜硝子体手術は世界トップクラス。2002年から網膜硝子体手術指導医としてベトナム国立眼科病院活動を開始。ベトナムでの献身的な活動が認められ、2013年には日本国務大臣表彰、第20回読売国際協力賞を、2014年にはベトナム政府より、外国人としては最高位の「友好勲章」を授与された。